



ヤ 4
1435
1



坪井信良譯

初白樓藏本記

侃斯達篤內科書

卷一 卷二

初白樓梓

老皂館 山茶房 英蘭堂

英蘭堂記

序

原本係日耳曼大學校醫局都講兼諸學科社頭カン 斯達篤スダツト氏所撰，別林ベルリ醫官邊阿孤ヘンコ氏增補訂正，改刷及第三回者，而荷蘭オランダ點設翁テウ氏翻以邦語，彼紀元一千八百五十七年鏤行，題曰原病治法各論者也。每病門揭症候原因，鑒別預後及治法之要，更附解剖症候，顯微鏡所驗，與舍密法檢查，博採諸家之說，證以自固之驗，一病一症，絲分縷析，而議論通暢，事理精確，實可謂闡幽發微者矣。抑西洋各國名哲輩出，殫精焦神，凡宇宙間之事物，溯源尋理，非窮其奧不

止者既尚矣、於是乎博物舍密之學、日新於一日、原生原病之術、大改舊典、隨醫方亦一變者不尠矣、若本編者、則近今醫方書中之純乎純、為當以足窺其真面目之一斑者、看官如脫舊套、別開一新眼、熟讀此書、則當臨病施治之際、得措置有法、去痼驅癥、猶響之應聲歟、是所以余先譯此編、公世也、雖然、日新之學、豈謂偏信此一書以為足乎、又若彼運堙里弗氏、費爾肖氏、諸家之書等、將俟他日以問世矣、元治元年三月、江戶醫學局教授越州醫員坪井良信良識

凡例

一 原本卷帙廣博、之ヲ譯スルニ、全編卒業ノ如キハ、歲月ヲ積ニ非サレハ能ハス、今編首ヨリ次序ヲ逐ヒ、隨テ譯シ、隨テ剝刷氏ニ附ス、是レ新近ノ論說ヲ、速カニ濟世ノ士ニ頒タント欲スルノ微意ノミ、故ニ前後或ハ譯例ヲ異ニスル者アラシ、看官幸ニ之ヲ恕セヨ、
一 編中時刻ヲ記スルニ、時、分、秒ノ字ヲ用フ、一時ハ、彼ノ一エールニシテ、我春秋分平等時ノ半時、一分ハ、一時ヲ六十分スル者、一秒ハ一分ヲ六

十分スル者ナリ、

一秤量ゲレイ、^シスクルペル、^ルオンス、^ハ先輩所製
ノ字ヲ襲用シテ、^ハ刃、^ハ弓ト記ス、^ダラクマ^ハ、^ハ莖
ト譯ス、是レ^レ了ト^ト弓ト^ト謬誤アラシト^ヲ恐レテ
ナリ、ポンド^ハ、斤ト譯ス、便ニ依ルノミ、

一病名、物名、藥名、皆先哲ノ所定ニ隨フ、但シ未詳
ノ者ハ、姑ク原名ヲ記メ、以テ識者ノ考按ヲ俟
ツ、

元治甲子三月

坪井良信良識

侃斯達篤全編總目次

補給機諸病第一

其一 血液製造諸病 多血、乏血之類

其二 血液循環諸病 鬱積、焮衝之類

其三 滋養増減諸病 肥滿、瘦削之類

神經機諸病第二

熱病 神經病

定類毒諸病第三

其一 發疹病 痘瘡、麻疹、羅斯之類

其二 卑濕病 間歇熱、古列刺、痢病之類

其三神經聖京假熱

其四零氣病 感冒、痿麻質之類

其五動物病 狂犬病之類

附中毒 山物毒、植物毒

其六傳染病 徽毒、癩病之類

其七敗血病 失苟兒、陪苦、痛風、痔疾之類

各部病第四

其一頭腦病

其二脊髓病

其三神經病

其四氣道病

其五血道病

其六消食器病

其七利尿器病

其八男子陰部病

其九婦人陰部病

其十腹部病

其十一皮膚病

侃斯達篤全編總目次 終

侃斯達篤初編目次

卷之一

補給機諸病第一

其一 血液製造諸病

多血

乏血

萎黃病

卷之二

其二 血液循環諸病

血液鬱積

焮衝 其一

卷之三

焮衝 其二

卷之四

出血

遺傳出血

卷之五

水腫

其三 滋養增減諸病

滋養過多

卷之六

滋養乏少 勞瘵 疳勞

風氣腫

脂肪腫

病性成形 善性腫瘍 惡性腫瘍

卷之七

腺病

卷之八

結石

軟解

硬結

寄生

Blank columns for text on the right page.



侃斯達篤卷之一

侍醫法眼坪井良信良譯

補給機諸病第一

其一 血液製造諸病

多血

多血トハ、血液ノ量、增多スルノ總稱ナリ、多血ハ固ヨリ疑ヲ容ルヘキニ非サレド、各人ノ血液調和ヲ精密ニ知ルヲ能ハサレハ、臆斷ニ過サルノミ、ア、ンドラル氏及ヒガハルレト氏曰ク、血體ノ

量増加スル者ニテ、古人ノ稱スルカ如ク、纖維質ノ増加スルニハ非スト、其血暗色、水液大ニ色ヲ帯ヒ、血餅大ニノ頗ル硬ク、多量ノ血水ヲ含ミ、真ノ豚肉皮ヲ結バス、

症候

多血ハ真ノ疾病ニ非ス、唯疾病ノ素因タルノミ、其人全然健康、營養旺盛、諸機活潑、總身病ム所ナシ、唯血液ノ分配不均ナルヲアルカ、或ハ古人稱スル所ノ局部多血トナリ、一部一系ニ於テ、血液輻進スルヲアルニ及テ、始テ疾病トナルナリ、未

タ此ノ如クナラス、單ニ多血ナルノミナレハ、全身肥豐、脈管機能旺盛、脈實、大ニノ力アリ、皮膚ノ脈管膨脹シ、皮膚赤色、溫度増進、筋力強盛ナリ、但シ之ニ兼テ動性諸機怠慢シ、精神爽快ナラス、嗜眠倦惰スル者屢之アリ、血液分配不均ナルニ及テハ、生活機能ノ諸患ヲ發ス、而シテ多血トナルノ部、各々異ナルカ故ニ、局部症ヲ發スルモ、亦數般ノ別アリ、是レ各部篇ニ於テ詳説スヘシ、抑モ多血症ヲ發シ易キノ部ハ、之ヲ他部ニ比スレハ、血液富饒ナルカ故ニ、固ヨリ多血部ト稱スル所ナ

リ、例之肺、心、腦、肝、脾是ナリ、此諸部ハ、多血トナレ
 ハ、疾病ヲ發シ易シ、殊ニ其部機能亢起スルキニ
 於テ然リ、則チ成童ノ年齢、冬時ハ肺病ヲ發シ、壯
 年ノ人、又炎熱ノ時令ニハ、肝病ヲ發スルカ如シ、
 多血ト、血液沸騰トヲ混スルコト勿レ、多血ハ持
 久ノ景況ニテ、血液沸騰ハ一時偶發ノ症ナリ、
 真ノ多血ハ、血液沸騰ヲ兼ル者多シ、之ニ由テ
 局部多血ヲ發シ、血液輻進、出血、焮衝、發熱スル
 アリ、血液沸騰ハ、血液輻進シ、一時ノ多血ヲ發
 ス、則チ夏日炎天ニ農業スル者、強テ進歩スル

ノ軍勢、強烈ノ飲液ヲ用フル時ノ如シ、其真ノ
 多血ト異ナル所以ハ、其發スル所ノ景況ト脈
 大ナレト軟ニシテ、無カトナリ、真ノ多血症ハ、脈
 強ニシテ力アリ、
 多血ハ高貴ノ人、逸居美食スル者ニ於テ之ア
 リ、其人、身體肥滿スレトシ、彈力少ナク、諸機強實
 ナラス、唯外貌ノミ、其肌肉脂肪多ク、軟ニシテ強
 固ナラス、皮表ノ脈管深ク皮下ニ沈ム、真ノ多
 血ニテハ、脈管皮上ニ隆起シ、太キ短ノ如シ、甲
 症ニ於テ、多量ノ血ヲ放出スレハ、脈管忽チ萎

縮ス、又一種假性多血ナル者アリ、肥胖ノ婦人
 是ナリ、是レ水分多キヲ以テ、血量增多スルノ
 ミ、而シテ血體ハ却テ減少スルナリ、
 肥滿ノ人却テ血少ナシ、スキユルツ氏曰ク、肥
 滿ノ牛ヨリハ、却テ瘦削ノ牛ハ、二十斤、三十斤
 以上ノ血アリ、ハレンチン氏曰ク、肥滿セル人
 ハ、瘦削ナル人ヨリハ細尿管中ニ多血ナリ、

原因

少壯ノ年齒、婦人、體質多血、北方ノ地ニハ、多血ヲ
 發シ易シ、其素因ハ、多クハ遺傳ニシテ、同化製血ノ

機盛ニ、其人勉テ補給營養ノ機能ヲ減損セント
 スレバ能ハス、血液ヲ製造スルニ盛ナル者ナリ、
 此ノ如ク補給機ノ増進スルハ、食餌膏粱、體動不
 給、運動少ナク、睡眠過多ナルニ由ル、又尋常習癖
 タルノ排泄、月經、痔血ノ閉止、刺絡ノ怠期、四肢ノ
 截斷、大尿管緊縛、湯乙狀排泄液ヲ速カニ吸収ス
 ル等、皆以テ多血症ヲ發スルナリ、然レバ必シモ
 上ノ諸症ヲ發スルハ、全身多血ナルニ非ス、血液
 運行急疾、各部血液鬱積スルハ、是レ局部多血ナ
 ルナリ、

局部多血、或ハ有形性障害ニ由ル者アリ、則テ體格畸異ニシ、血液分配平均ナラス是レ佝僂ノ人、孟骨ト胸骨トノ間隔狭窄、由テ血液ノ循環平均十全ナルヲ得ス、四肢ノ畸形、亦同因ヲナスナリ、抑モ多血ナレハ、疾病ノ素因トナリテ、焮衝、出血、滋養過多ヲ發シ易シ、

治法

多血ナルノミニテ、未タ疾病ヲ起サ、ルノ間ハ、固ヨリ直チニ之ヲ治スヘキノ法ナシ、唯攝生ヲ節度ニシ、補給ヲノ費耗ニ超越セサラシメ、適宜

ノ食餌、動物ヲ少ナクシテ、植物ヲ多カラシメ、水ヲ多飲シテ、血液ヲ稀薄ニシ、排泄ヲ增多ナラシム、此法實ニ多血ノ後害ヲ預防スルニ足ル、運動ヲ多クシ、長眠及ヒ逸居ヲ禁ス、

血液分配平均ナラサルニ由テ、健康ヲ害スルニ至レハ、刺絡ヲ必須緊要法トス、固ヨリ局部瀉血ノ能ク代ルヘキニ非ス、兼テ誘導法、下劑、消焮治法ヲ施コスヘシ、但シ多血ノ性真假辨シ能ハサル者ニハ、妄リニ刺絡スルヲ勿レ、夫レ一時血液沸騰、夏日ニ發スル者ノ如キニ於テ、誤テ刺絡ス

レハ、其害却テ少カラス、是レスクミユケル氏ノ
 歴驗スル所ナリ、滴浴法、頭部冷水洗法ハ、安リニ
 刺絡ヲ施コノ、死地ニ陥ラシムヘキノ患者ヲ救
 フニ足ル疑似ノ際ニ於テハ、試ニ少量ノ刺絡ヲ
 施コシ、或ハ局部瀉血ヲ以テ、其功害ヲ測リ、更ニ
 血液ヲ漏泄スヘキヤ、將夕之ヲ貯フヘキヤヲ決
 スヘシ、

乏血及萎黃病

乏血トハ、血液乏少ナルヲ云フ、
 血液乏少ト、血液減損トハ、自ラ別アリ、血液減損
 ハ、一時ノ發症ナルノミ、血液乏少ハ、持久スルノ
 景況ナリ、
 血液乏少、或ハ一部、一器ニ於テスルアリ、又全身
 皆然ルヲアリ、
 全身諸部顯ニ血液乏少ナルアリ、所謂乏血、又洩
 乙減少スルニ非スノ、血中ノ必要ナル成分、血體、
 纖維質、乏少ナル者アリ、此症ノ兆候、真ノ乏血ト

伊其遺篇卷一
相似タル者、之ヲ血液稀薄、又血液無力ト稱スヘシ、抑モ血液ノ分量減少スルヲアレハ、必ス其性質ヲモ變スヘキヲ、自ラ知ルヘシ、固ヨリ相分テ考フヘキ者ニ非ス、真ノ乏血、即チ全身血液ノ量減少スルハ、必ス、血中各種ノ成分、兼テ減少スル者ニテ、多量ノ失血後ニハ必ス發スル所ナリ、則チ直チニ血體減少シテ、沕乙液過多トナリ、脈管流動液ヲ吸收スルヲ增多スルカ故ニ、必ス大渴ヲ發シ、之ニ由テ全身血液ノ量ハ、却テ失血前ヨリハ增多スルヲアリ、

此時患者滲淡衰脱スレヒ、脈動奮起シ、動脈ノ鼓動顯著ニシ、血液ノ脈管ヲ運行スルノ音聽クヘシ、是レ大失血後ノ減血ニハ無キ所ナリ、故ニレース氏ハ、乏血ヲ治スルニ、水液排泄ヲ催進スルノ法發汗藥、利尿藥、通利藥ヲ主張スルナリ、

萎黃病ハ之ニ屬スヘキ一種ノ乏血ナリ、但シ其原因尚未タ詳カニセス、世醫通稱スル所、萎黃病ハ、少女天癸將ニ至ラントスルニ方テ發スル所ノ慢性乏血病ナリ、但シ皮膚ノ萎黃スルハ、他

ノ疾病ニ於テモ發スル所ナレハ、ハレンチチル
氏ノ説ニ隨テ説クヲ當レリトス、則チ一種ノ乏
血病ニテ、顯著ナル原因アルニ非スノ、血體減少
スル者ナリ、

血液検査 諸之血症ニ見ル所ノ兆候、萎黃病ニ
於テ之ヲ見ル、必見ノ症ハ、血體減少スルカ故ニ、
漏泄スル所ノ血ノ異重、又血灰中ノ鐵分、共ニ少
シ、又必ス血水ノ量增多シ、鹽分、卵白質、纖維質、皆
比例ヲ失シテ少ナシ、是レ但シ必見ノ症ナラサ
ルカ故ニ、或ハ平全ノ量ヲ保持スルアリ、或ハ減

少スル者アリ、靜脈ヨリ漏ス所ノ水様血液、速カ
ニ凝固スルモ、其血餅小ニシテ、表面鮮紅色ナリ、多
クハ帶綠黃ニシテ、極テ稀薄ナル血水ニテ之ヲ圍
色ス、血餅上ニ豚肉皮ヲ結フ、

ユル子リアニ氏曰ク、豚肉皮ヲ結フハ、其焮衝
性ニ傾ク者ニ於テノミ然リト、但シ他氏ノ驗
スル所之ニ異ナリ、夫レ豚肉皮ハ、即チ血體減
少スルヲ兆ナリ、故ニ血餅ノ上部ハ無色ナリ、
是レ決シテ消焮法ヲ施コスヘキ者ニ非ス、ハ
ンノヘル氏曰ク、萎黃病ノ婦人ハ、炭酸ヲ呼出

スル一、大ニ平全ノ人ヨリハ多シ、但シ單純ノ
乏血ノ人ハ、炭酸ヲ呼出スル一少ナシ、

試ニ獸類ニ於テ、頻回刺絡シ、以テ之ヲ證スヘ

シ、則チ湯乙增多シ、血餅小トナリ、卵白、纖維質、

鹽分、血體、減少ス、マルサルル、ハルル氏、及ハ、ナ

スセ氏曰ク、多量ニ瀉血スルノ後ハ、湯乙中ニ

脂肪多ク存スト、是レ脂肪ヲ吸收スル一多キ

ニ由ル者ナルヘシ、

解剖症候

乏血ノ部ハ、其色滲淡、乾燥、無血、之ヲ截リ、之ヲ押

シ、之ヲ裂クモ、一滴ノ血ヲモ漏サス、周圍減小シ

萎縮シ、或ハ全然軟解ス

全身乏血ノ者ハ、死後心ノ右房、大動脈、大靜脈、毛

様管網ニモ、血液極テ少ナシ、血液ノ凝結スル者

モ、小ニソ軟、心藏軟脆、全身諸部殊ニ腦、肺、肝、腎、及

ヒ諸筋滲淡、稍乾燥ス、而ノ牢實ナラス、膜狀組織

ハ、滲淡、平滑腸ノ内面ニハ夥シク粘液ヲ密敷ス、

但シ脾、腦膜ノ如キハ、甚シキ乏血ニ於テモ、全ク

血虚トナル一ナク却テ血液鬱積スル一アリ、

ロキタシスケ一氏解剖書中ニ記ス曰ク、其人

固有ノ體質ニテ、殊ニ婦人心藏狹窄、動脈成育十分ナラス、隨テ乏血ノ者アリト

症候

乏血症候、急性、慢性ノ別アリ、

一 急性乏血

卒然トシ多量ノ血液ヲ失スレハ、忽チ大ニ衰脱シ、動性諸機能ヲ失シ、麻痺、癱瘓、五神其用ヲ廢シ、耳鳴昏冒、卒仆、精神昏迷、腦髓麻痺等ノ症ヲ發ス、肺藏麻痺シテ、呼吸絶シ、全身冰冷、活色ヲ失シ絶脈シテ、頓カニ死スルアリ、大人ハ、失血ヲ堪フ

ルコト小兒ヨリハ易ク、婦人ハ男子ヨリハ易シ、乏血ニ由テ發スル所ノ症ハ、一種ノ者ニシテ、其部ノ抵抗運營ニ起ル者ナリ、故ニ多血若クハ他ノ刺衝ニ由ル所ノ症ト同シ之ニ由テ謔妄、耳鳴、羞明、眼火散爛、痙攣等ハ、頭腦ノ乏血ヨリ發ス、又努力ノ後、久ク起立スルニ由テ、此等ノ症ヲ發スルコトアリ、但シ患者ヲ平卧セシムレハ、即チ治スヘシ、今夫レ失血シテ衰弱セル獸類ノ前脚ヲ掲ケ舉レハ、忽チ昏冒ス、又後脚ヲ舉上スレハ、直チニ之ヲ復スヘシ、故ニ失血

ノ患者ハ、其體ヲ高クシ、頭部ヲ低クシ、血液ヲ
 腦ニ輻進セシムヘシ、然ルニ多量ノ出血ニテ
 死セル人ノ屍ヲ解觀スルニ、出血ニテ死セル
 獸類ノ如ク、腦及ヒ腦膜ハ、他部ニ比スルニ、血
 液鬱積スル者アリ、此理ハ後ニ詳説スヘシ、

二慢性乏血萎黃病

下ニ記載スル諸般ノ證候ニ由テ之ヲ知ル、
 其一、血液ノ症候、外部皮膚、粘液膜、眼ノ白膜、乳
 頭、唇、舌、齒齦、頬ノ内側、蒼白色ニノ蠟ノ如ク、小便、
 經血、色ヲ失シ、溫度減少、屢憎寒戰慄シ、全身顯シ

ク厥冷ス、

患者身體若クハ精神ニ感動スルコトアレハ、顔
 色蒼白ノ者、兩頬忽チ紅ヲ潮ス、又少女、萎黃病
 ニ罹ル者、醫者診察ノ際、眼ノ白膜急ニ赤色ヲ
 發シ、意思ノ感動ニ由テ、復タ忽チ其色消スル
 コトアリ、以テ神經機能ハ、細脈管ノ血行ニ大ニ
 關係スル者タルヲ證スルニ足ル、

其二、神經諸症、

全身脱力、少許ノ運動ニテモ、忽チ倦怠、疲勞シ、精
 神沉鬱シテ、靜黙ヲ好ミ、故ナクシテ歎息、啼泣シ、

或ハ死ヲ求メテ止ス、好テ睡眠シ、動作ニ懶ク、或ハ後頭ノ定所ニ於テ、劇痛ヲ發シ、又諸部神經痛ヲ發ス、殊ニ胃、心、頸、面部、肋間神經ニ於テス、又或ハ搐掣、子宮病ヲ發スルアリ、

其三、血液循環諸症、

少許ノ運動ニテモ、心悸動ヲ發シ、心動響アリ、少許ノ情意感動アルモ、心動韜音ヲ發シ、心藏大脈管共ニ響アリ、脈動數小、震蕩軟虛、又或ハ脈大ニ震搖スル者アリ、是レ動脈凝收力ヲ失スルニ由ル、ヘルレー氏或ハ脈大強ニノ醫若シ全身ノ景

況ヲ參考セサレハ、誤リ認テ心藏病トナシ、或ハ焮衝ナリトスルコトアリ、

血液乏少ナル者ニ於テ、發スルノ數脈ハ、須ク注意シテ之ヲ鑒別スヘシ、消耗諸病ニ續發スル者ナルヤ、將タ哺乳過久ナルニ、由ル者ナルヤ、但シ必シモ稽留スル熱ノ有無ヲ以テ辨スヘキニ非ス、

其四、呼吸機諸症、

患者氣息絶止シ易ク、咳嗽シ易シ、殊ニ階ヲ上リ、疾行スルノ後、又動脈血ヲ費ヤス所以、肺、心ヲ動

搖スル所以ノ諸件アレハ皆然リ、此時直チニ平
卧シテ静息セサレハ、忽チ眩暈、昏倒ス、
其五、消化機諸症、

食欲缺乏、或ハ異嗜好テ土質、酸性諸物、加爾基、泥
土類、炭、鹽、醋、未熟ノ菓實、酷烈ナル香料ヲ求メ、消
化失宜、心窩ニ於テ壓迫、膨滿、疼痛ヲ患ヒ、

凡ソ此患者、患フル所ノ胃痛、常ニ必ス神經性
ナリト思フコト勿レ、宜ク詳カニ胃部ヲ診察シ、
精細ニ内外諸因ヲ探ルヘシ、萎黃病ノ處女、胃
ノ粘液膜ニ慢性ノ焮衝、腫瘍ヲ生シ、外貌神經

痛ノ如クニシ、卒然トシテ胃穿開トナリ、頓カニ
死ニ陥ル者少ナカラス、故ニ極テ精密ニ鑒定
スヘシ、

咽喉灼クカ如ク、吞酸、嘈雜、酸液ヲ吐出シ、風氣雷
鳴、便秘、或ハ下利ト交發ス、

其六、諸排泄、尿量減少、其色澄清、異重減シ、微酸
臭アリ、ベキユエレル氏試驗スルコトアリ曰ク、萎
黃病者ノ尿ハ、尿素、尿酸減少シ、而シテ可燃性ノ鹽
分多シト、

其七、營養、肌肉弛緩シ、稀ニハ瘦削ス、成育ノ期

ニ方テ、發成ノ機進マス、皮膚及ヒ毛髮、乾燥糙澁
ス、

其八、陰部、經行順調ナラス、或ハ過多、或ハ過少、
或ハ忽チ來リ、復タ忽チ止ム、其血白濁水ノ如ク、
布片ヲ汚セハ、斑痕ヲ遺ス、但シ乾燥スレハ、其色
褪散ス、此等ノ諸症、必シモ萎黃病ヲ決スルニ要
ナシ、萎黃病ニシテ經行順調、或ハ更ニ過多ニシテ
常ニ異ナラサルアリ、但シ必ス白帶下狀ノ汚液
ヲ漏シ、浸淫シテ陰部ニ輕々ノ小腫瘍ヲ生ス、然
レモ陰部ヲ検査シ、局處治法ヲ施コスコトハ、多ク

ハ患者耻テ秘スルカ故ニ、能ハサル所ナリ、
脱血ト、乏血トヲ鑒別スルノ症候中、最要ナル
者ハ、頸部脈管ノ音ヲ聽取スル是ナリ、則チ聽
管ヲ用テ試ルニ、二様ノ音アリ、甲ハ樂器ヲ吹
クカ如ク、乙ハ連續ノ音ナリ、甲ハ實ニ動脈ニ
起ル者ナリ、故ニ心室ノ收縮ト相應シ、又今檢
スル所ノ部下ノ頸動脈ヲ強壓スレハ、則チ止
ムナリ、心藏又大動脈ノ諸患、皆此音ヲ發シ、又
健康ノ人ニ於テモ、心藏ノ機能亢盛シ、兼テ頸
部ノ諸筋牽張スルキニモ然リ、又更ニ聽管ニ

テ直チニ大動脈ヲ壓迫スルニ由テモ然リ、故
ニ脱血、乏血ヲ鑒別スルノ確兆ニハ非サレ、
乏血ニハ必ス頸部ノ脈管顯シク強音ヲ發ス
ルナリ、乙音ハ連續シテ噴泉ノ如シ、是レボウ
イルラウト氏首唱スル所ノ「ノン子」音ナリ
ノン子ハ小兒翫弄物ノ名、亦心藏ノ收縮ス
之ヲ鳴ラシ遊戯スルナリ、ルキニ、其音強トナルカ故ニ、同シク動脈ニ起
ル者ト云フヘシ、血液相摩軋シ、動脈内面ニ衝
撞スルニ由ル、キユイス氏曰ク、動脈ヲ壓迫ス
ルモ、之ヲ聽クヘシト、ポツペ氏及アラン氏首

ニ此音ノ靜脈ニ出ルノ説ヲ唱フ、此音ハ咽喉
ノ靜血脈管兩端ノ中間、殊ニ右側ニ於テ聽ク
ヘシ、若シ人咽喉靜脈ノ血行ヲ、聽管ノ上部ニ
テ壓シテ文フレハ其音止ム、但シ指ヲ放テハ
復タ音ヲ發ス、起立スルキ、又吸氣ノ時ハ、其音
強シ、然レ氏強ク呼息スレハ止ム、是レ血液咽
喉靜脈ニ迴流スレハナリ、又身體ノ位置ヲ變
シ、頭ヲ低レ、胸ヲ高クシ、咽喉靜脈内ノ血行ヲ
遲徐ナラシムレハ、其音ヲ聽カス、スコダ氏其
音弱キ者ハ、強ク吸氣スレハ、明亮トナル、然レ

氏深息スルキニ氣管ニ發スルノ音ト、靜脈ニ起ルノ音トヲ混スルヲ勿レ、故ニウエベル氏深息ノ時、指頭ニテ靜脈ヲ壓シ、又之ヲ放チ、以テ深息ノミノ音ト、靜脈ノ音ト合スル者トヲ、聽分ツノ法ヲ定ム、患者大ニ瘦削スルカ、水腫ヲ病ム者ニハ、靜脈音止ムヲ常トス、

大靜脈充盈セス、血液ノ運行容易ニシ、疾速ナルハ、則チ此音ヲ發スルノ本原ナリ、故ニ凡ソ血量減少、血質水分ヲ含ムト多キ諸病ニ於テ聽クヘク、萎黃病、及ヒ敗血諸病皆然リ、抑モ此

音萎黃病ニ發スル者最モ多シト雖、未タ以テ確然鑒別ノ證トナシ難シ、健康無事ノ人ニテ全然少シモ、乏血ノ症ナキ者ニモ、之ヲ聽クトアルハ疑ナキ所ナリ、ゴリユプ氏舍密法試驗ニ據テ曰ク、靜脈音アル人ノ血ト、健全ノ血トヲ比較スルニ、少異アルトナシト、

原因

乏血ヲ發スルノ原因、三様ノ別アリ、一血液ヲ費用スルト過多ナル者、二血液製造ヲ妨ケ、或ハ之ヲ多カラサラシムル者、三各部ノ血行ヲ妨ケ、一

局部ニ於テ凝固スル者、

其一 血液ヲ費用スル極テ多ク、遂ニ全身ノ血液ヲ減少スルニ至ル、然ル所以ハ、過急ノ成育、多量ニ卒然ニ發スル失血、又少量ニ頻回發シ來ル失血、殊ニ身體努力ヲ兼ル者、下劑、刺絡ヲ過用シテ、血液ヲ失スル者、過久ノ哺乳、流涎、多量ノ膿液漏泄、下利、粘液漏泄、脱汗、經行過多、過房、運動過多、妊孕頻回、贅肉發成ナリ、急性病愈後、殊ニ食餌禁忌嚴ニ失スレハ、久シク此症ヲ遺スナリ、其二 血液製造ヲ妨クル所以ハ、凡ソ血液製造

同化及排泄ニ必須ナル要部ノ諸患、消化失宜、腸、肝、脾、肺、心、腎、大尿管、乳糜脈、腸間膜諸患、食餌不給、硬固ニシテ消化シ難キ物ヲ連用スル、殊ニ兼テ體動過多、空氣汚穢、坑夫多ク乏血ヲ病ムハ之カ爲ナリ、就中石炭坑内ノ硫水素氣、炭酸多キ氣、又濕潤ナル陰谷、及間歇熱、地方病タルノ地ニハ、之ヲ病ム者多シ、鑛屬鉛、銅、水銀、砒石ノ蒸氣ヲ含ムノ氣ハ、大ニ血質ヲ損ス、是レ坑夫ニ此病多キ所以ナリ、酸性ノ植物毒ニ中テ死セル獸類ハ、血液減少ス、又酸素不給ノ氣、光素缺乏ハ、共ニ血液製造

ヲ害スル者ナリ、
 エトワルヅ氏曰ク、暗所ニテ養フノ獸類ハ、諸
 部能ク肥胖スレト、唯白色ノ液增多スルニ由
 ルノミ、又牢内ニ在リ、常ニ昏暗ノ洞穴ニ居テ、
 少シモ日光ニ觸レサレハ、幽囚ニ三日ニノ、面
 色忽チ蒼淡トナルヲ、猶乏血ノ人ノ如シ、脈動
 一分時間、八十動、九十動ニ至ル、而ノ他患アル
 一ナシ、

洞穴ニ居住スル、少女天癸始テ至ル、神經機能ヲ
 抑壓スル事件、悲哀、過慮等、皆乏血ノ因トナル、

實驗ニ據ルニ、慾情ノ發動ハ、萎黃病ヲ發スル
 ノ最大因ナリ、但シ然ル所以ノ理ハ、未タ之ヲ
 詳カニセズ、或ハ曰ク、其機能ヲ妨クルニ由ル
 ト、或ハ曰ク、婦人ノ鋭敏ナル機能ヲ妄リニ刺
 戟シ、夙ニ慾情ヲ煽動シ、其意ヲ遂ケス、戀情慰
 スル所ナク、手淫、獨悦、稗史ヲ讀ミ、春畫ヲ看ル
 等ニ由ルト、然レト、此等ニ關係セサル者、亦少
 ナカラス、其最モ關係スルハ、坐業ト、公工局、裁
 縫肆等ノ汚穢ノ氣是ナリ、此類ノ所ニハ、衆人
 群集シテ、空氣ハ汚穢トナル、是ニ於テ縫女此

病ニ羅ル者多シ、又市井ニ多ク、田舎ニ少ナク、
 北地ニ多ク、南地ニ少キ、亦以テ知ルヘシ、又女
 兒ノ夙ニ狭窄ナル衣ヲ服スル、一因ト云ヘシ、
 春時ト秋末ニハ、此病多キヲ、冬日夏日ヨリ甚
 タシ、而ノ病院ニ入ル者、亦此時ヲ多シトス、抑
 モ近世此病ノ增多スルヲハ、官吏ノ知ル所ナ
 リ、

但シ萎黄病ハ、天癸始テ至ルノ少女ニノミ發
 スルニ非ス、小兒又妊婦モ之ニ罹ルヲアリ、妊
 婦ノ血液殊ニ妊孕第五月以徃ニ於テハ、血體

減少シ、隨テ鐵分少シ、ベキエレル氏及ロジ
 ル氏曰ク、健康人ノ血ハ、千分中、鐵零、五四一分
 アリ、妊婦ノ血ニハ、零、四四九分ノミ、世醫多ク
 ハ妊婦ニ發スル諸症ヲ多血ニ由ル者トシ、治
 ヲ處ス、然レ氏水様多血ニシ、真ノ多血ニ非ス、
 故ニカレアウキス氏ハ、總テ肉類及消化シ易
 キ品ヲ與ヘテ、血液ノ脈管中ニ衝撞スルヲ鎮
 靜スルニ、少量ノ瀉血ヲ行フヲアルモ、極テ少
 ナリ、老年ノ婦人、又男子モ之ヲ患フルヲアリ、
 而シテ其諸症ハ、少女ニ發スル萎黄病ト異ナル

トナレ、又夫レ神經機能ノ敏捷ナルハ、血液ノ良全ナルニ由ルカ如ク、血液ノ良全ナルハ、神經機能ニ關涉スルナリ、故ニ萎黃病ノ原、或ハ血液ニ在リ、或ハ神經ニ在リ、醫宜ク之ヲ察スヘシ、

其三 局部ノ血行ヲ妨クル所以、或ハ器械性因ニ由ル、壓迫、動脈消滅、閉塞、愈着等是ナリ、

又一種桔槔機ニ由ル乏血アリ、是レ一部ニ於テ血液鬱積シ、他部ニハ減少スル者ナリ、婦人經行中、顔面、唇色滲淡、眼圍青暈ヲ發スルアリ、

或ハ偏頭痛等ノ症ヲ發ス、是レ血液ノ分配、全身平等ナラス、腦中乏血ナルニ由ルナリ、一部多血ナレハ、他部乏血トナル、又其症少量ノ失血ト符合セサルカ如キアリ、血液分配ハ、桔槔機ヲ以テ説クヘキノミ、少許ノ鼻血、咳血、咯血等ニ於テ、脈小、面色滲淡、眩暈、昏倒スルアリ、又外表ノ部、血液減少シテ、腸、腦膜等ニ於テ甚シキ多血症ヲ發スルアリ、

經過終歸

乏血ノ經過、多クハ緩慢ナリ、或ハ頓力ニ萎黃病

ヲ發スル者アリ、又輕微ノ疾患ナルニ、驚駭、情意
 感動ニ由テ、俄カニ大病トナル者アリ、醫藥ヲ用
 テ多クハ治スヘシ、能ク危險ニ傾ク者ヲ救ヒ、又
 能ク死狀ヲ具スルノ顔貌ヲ變シテ、美麗ノ容色
 ヲ得セシムヘシ、其復治スルヤ、徐クニノ顯著ナ
 ル變移ナシ、是レ血液ノ量、及ヒ質、漸次ニ平態ニ
 復スルカ故ナリ、食欲、顔色平ニ復シ、體温常ニ回
 リ、怠惰ノ者活潑ヲ得ルハ、是レ治愈スルノ確徵
 ナリ、經行順調ヲ得ルヲアルモ、血液製造佳適ヲ
 得ルノ徵アルニ非サレハ、未タ以テ治愈ヲ期ス

ル能ハス、萎黃病ノ經過、數月、數年ニ及フヲアリ、
 治愈ニ進ムノ間ニ、復タ其歩ヲ停ムルヲ屢之ア
 リ、治ヲ施コスハ、温暖ノ時期ヲ最佳トス、治愈ノ
 後モ、殘藥猶未タ全ク盡ス、春時ニ及テ、怠惰ヲ發
 シ、又復發數回ニ及フアリ、或ハ神經機能ノ失宜、
 感覺過敏、神經痛、子宮病、神思鬱憂、或ハ心悸動、心
 藏肥厚、開大等ヲ遺スヲアリ、或ハ萎黃病愈後、一
 種ノ腹滿ヲ發スル者アリ、

全身乏血ナレハ、敗血ヲ生シ、又諸般ノ全身病
 局處病ノ素因トナル、又乏血ナレハ、虛性熱、腐

敗熱間歇熱、神經病、水腫、敗血、虛性失血ヲ發シ
易シ、局部症ハ寒壞疽、軟解ナリ、
預後

原因、病性、合併病ニ隨テ、之ヲ定ムヘシ、根治法ヲ
施コシ、攝生ヲ適宜ナラシムルヲ得ル者ハ、大
ニ佳ナリ、總テ已ニ經行アルノ婦人ニ發スル乏
血ハ、未タ經行ヲ見サルノ少女ニ於ケルヨリハ
更ニ頑固ナリ、諸症ノ劇甚ナルヨリハ經過ノ緩
慢ナルヲ恐ルヘシトス、抑モ萎黃病ニ於テ、最モ
危險ナルノ症ハ、病間發スル所ノ心病ト、胃病ト

ナリ、肺藏結節ヲ生スル亦恐ルヘシ、萎黃病者、瘦
削、咳嗽スル者ハ、精密ニ診察スヘシ、萎黃病者ニ
ハ交接ヲ行ハシメ、妊孕スレハ治スト、是レ往時
ヨリ世普ク唱フル所ナレトモ、妊娠中ハ、血體大ニ
減少スルヲ見テ、以テ其非ヲ悟ルヘシ、

鑒別

滲淡色、黃疸、脾病、黴毒、及ヒ他ノ敗血病、内部腐敗
溶崩ト混シ易シ、心悸動、有形性心病ト混シ易シ、
膨腫、真ノ水腫ト混シ易シ、神經諸症、胃機失宜等
他病ト混シ易キヲ以テ、之ヲ鑒別スルヲ易カラ

ス、此病ヲ辨別スヘキノ事件、今其最要ナル者ヲ掲ク、

萎黄病ノ皮色、黄疸ニ似タレ、眼ノ白膜ハ、必ス真珠色ナリ、黄疸ハ先ツ眼中ノ色ヲ變ス、又黄疸ニハ、心悸動ナク、靜脈音ナシ、且ツ尿色黄濁、大便黄色ヲ失ス、以テ之ヲ辨スヘシ、

脾病ノ皮色多クハ蒼ニ近シ、但シ血質ヲ損シ、血體ヲ減スルヲ甚シケレハ、大ニ疑似ノ者アレ、脾部顯シク腫起スルヲ以テ、之ヲ知ルヘシ、又微毒ハ、必ス局部症アルヲ以テ、之ヲ辨スヘシ、

心悸動ト心藏器械病ト、辨別スルヲ極テ難シ、是レ心病常ニ悸動ヲ起シ、又譫妄、膨腫、皮色汚穢ヲ兼發スレハナリ、且ツ萎黄病、終ニ心藏病ヲ起シ、又其相合併スル者アルヲ以テ、其已ニ心病ヲ起セルヤ、否ヤヲ決スルヲ、殆ント能ハス、但シ之ヲ辨別スルニハ、次ノ諸件ヲ以テス、

萎黄病心悸動

器械性心病

情慾發動ノ時、婦人ニ於ケル、是鑒別ノ一要件ナリ、

心悸動ヲ發スル他症ト	心藏諸患症ヲ發スルハ、
併セ起ル、	皮色變スルノ前ニアリ、
悸動頓カニ起リ、又忽チ	諸症間歇スルヲナク、常
止ム、全然休歇ノ時アリ、	ニ持續ス、心動音アリ、必
身體運動、情意感動ノ後、	ス強シ、心ノ機能常ニ亢
經行來ラントスル片、最起	スルカ故ニ、心部ノ波
モ甚タシク、諸症減退ス	動亦著シ、之ヲ敲クニ鈍
レハ、復タ隨テ鎮靜ス、鼓	音アリ、
動增多ナレトモ、音弱シ靜	
脈音アリ、	



刺戟劑、鐵劑、能ク之ヲ鎮	刺戟劑ヲ用フレハ、必ス
靜ス、	増悪ス、
面色滲淡ナレトモ、屍色ナ	滲淡色全面ニ及ハス、頰
シ、	唇大ニ屍色アリ、
然レトモ此二病ヲ辨別スル	ト、或ハ極テ難キ者ア
リテ、萎黃病ヲ誤リ認テ、心	病ト爲ス者少ナカラ
ス、其誤リ易キハ、心藏ノ動	脈口ニ音アルト、又之
ヲ探ルニ、心藏大トナル者	是ナリ、甲症ハ萎黃病
ニ於テ、心藏有形因ナキモ	之ヲ發スルヲアリ、又

強ク鈍音ヲ發スルハ、心藏開大スルニ由ルヲアリ、是レ血液減少シ、心藏ノ筋質、彈力ヲ脱シ、輸送スル所ノ血液ニ抵抗スルノ力足ラサル所ナリ、余嘗テ此ノ如キ患者二人ヲ療ス、共ニ鐵劑ヲ連用シテ、其鈍音ヲ鎮靜シ、平全ニ復スルヲ得タリ、

萎黃病者ノ膨腫ハ、其未タ水腫ニ陥ラサル者ニ於テハ、唯宵間ノミニ、夜中ハ消散ス朝ニ眼瞼、面部大ニ腫起ス、又尿ヲ檢スルニ、卵白質大ニ減ス、是レ一大要件ナリ、

治法

根治法ヲ施コスニハ、外貌症候ヲ精密ニ探索シ、凡ソ病ヲ起ス所以、又之ヲ保持スル所以ノ諸件ヲ退クヘシ、消耗性ノ排泄、出血、粘液漏泄等、其能ク為シ得ヘキ者ハ、之ヲ閉止スヘシ、血液製造諸器ノ失宜、例之消化力失常ハ、其定法ニ隨テ、之ヲ處置スヘシ、若シ夫レ地方ノ性、一時雰圍氣ノ質、病因トナル者ハ、患者ノ景況ニ隨テ、之ヲ避ケシムヘシ、情慾發動ノ期ニ於テ發スル乏血萎黃病ハ、生殖機能ニ注目シテ、之カ治ヲ處スヘシ、其機

能失宜、竊カニ遠因トナル者アリ、總テ情慾ヲ挑
 發スル所以ノ諸件ハ、皆之ヲ避クヘシ、起熱性ノ
 飲食、戀愛ノ情ヲ起ス所以ノ事件、情意感動、稗史
 ヲ讀ミ、戲場ヲ觀ル、安逸閑居、柔軟ナル毛褥ニ卧
 ス、是レ畜ニ閉塞ヲ起スノミナラス、更ニ衰弱ヲ
 保持シ、生殖機器ニ害アリ、長眠亦然リ、戀情達ス
 ルヲ能ハス、沉鬱憂傷スル者ハ、箇斯老翁依ト加
刺的斯
 氏異稱ノ論書ヲ講シ教誨スヘシ、
 世或ハ妊孕セシムルヲ以テ、萎黃病ヲ治スル
 ノ要法ナリトスレ氏、本文記スル所ノ法則ニ

據テ、適宜ノ治法ヲ施コシ、血質ヲ復良スルヲ
 最モ勝レリトス、

養育法正キヲ得テ、徒ニ情意ヲ慰撫シ、安逸ナラ
 シムルヲナク、精神身體ヲ順正ニ使役シ、妄ニ淫
 情ヲ煽動スルヲナキハ、自ラ萎黃病根治法ト云
 フヘシ、
 乏血、萎黃病ノ直治法ハ、強壯收斂藥是ナリ、最要
 ノ規則ハ、患者ノ體力ヲ測リテ、收斂品ヲ妄用セ
 ス、漸次ニ其量ヲ增多スルナリ、
 鐵ハ、萎黃病ヲ治スルノ奇效品ナリ、許多ノ方劑

多クハ之ヲ配ス、ノマン氏ノ古語ヲ至當ナリト
 ス、曰ク欲增多血量、宜增多鐵量、アンドラル氏ガ
 ハルレト氏、シモン氏等ハ、萎黃病者ニ鐵劑ヲ用
 ヒテ、其前後ノ血液ヲ分拆シ、以テ鐵劑ハ血體ノ
 量ヲ常度ニ復スルヲ微ス、然レヒコル子リア
 ニ氏曰ク、是レ服用一二月以後ニ及テ、始テ然ル
 ナリト、

但シ血體ノ增多スルハ、鐵ニ由ル所ニテ、良全
 ノ食餌ト、乳糜製造ノ多キニ由ラサルヲ證ス
 ルカ為ニ、コル子リアニ氏、多量ノ鐵劑ヲ用ヒ

タル萎黃病者數人ニ、單ニ植物ノミヲ食セシ
 メ、之ヲ試ハルニ、果ノ同様ノ變化ヲ見ル、又其
 肉食ヲ與フル者ニハ、卵白質ト、纖維質增多ス
 ルヲ見ル、是レ其脈管系ノ過度ノ刺戟ヲ減節
 セサレハ、必ス害アルヘキノ状態ナリ、ストラ
 ル氏曰ク、鐵ノ量ハ、食物ヨリ血中ニ賦與スル
 所ニテ、萎黃病ノ人モ、健康ノ人モ異ナルヲナ
 シ、萎黃病者ノ血中、鐵分少キハ、其因他ニ在リ
 テ、鐵分ヲ賦與スルノ少キニ由ルニ非ス、故ニ
 萎黃病ハ、器械機能ノ失宜ニ根據シテ、滋養液

ヲ製造シ、適宜ノ成分ヲ血中ニ賦與スルヲ能
ハサルヨリ發スル者ナレハ、先ツ其消化力ヲ
復治スルニ非サレハ、終ニ本病治ヲ得スト、又
之ヲ保證スルニ一例ヲ示ス、鐵劑ヲ連用スル
ト久シクノ効ナシ、乃チ長眠ヲ禁シ、冷水洗法
ヲ施コシ、適宜ノ運動、減節ノ食餌ヲ用テ、始テ
治スル者アリ、キユル子ル氏亦此說ヲ唱フ、余
亦此類ノ經驗多シト雖、是レ患者固有ノ體質
ニ由ル者ニテ、衆患者皆然リト為スヘキニ非
サルナリ、

萎黃病者、皆能ク直チニ鐵劑ヲ服シ得ルニ非ス、
消化機能健康ナル者ノ如ク、則舌清潔、便通適宜等、
故ニ消化機失宜ナル者ニハ、先ツ適當ノ下劑、大
黃、或ハ純苦味藥ヲ配シテ、之ヲ疎滌シ、後始テ鐵
劑ニ移ルヘシ、此時尚苦味品ヲ配用ス、又上ニ記
スルカ如ク、或ハ膿潰性胃患ヲ具スル者アリ、是
レ鐵劑ヲ用フルニハ、最モ注目スヘキ症ニテ、宜
ク緩和ノ食物、胃部ニ局處瀉血ヲ施コスヘキ者
ナリ、鐵劑ヲ用フルニハ、其最モ消化シ易キ品ヲ
撰フヘシ、榎楂加鐵、丁幾、鐵亞的兒、丁幾、炭酸鐵、酒

石酸鐵、乳酸鐵、天造鐵泉、人造鐵泉、單用之、或ハ苦味浸劑ニ配用ス、漸次ニ進テ、消化シ難キ強力ノ鐵劑ニ及フナリ、

苦味品ノ以テ鐵劑ヲ用フヘキノ道路ヲ開キ、又以テ之ト配用スヘキ者ハ、括失亞、睡菜、葛兒、儒別涅秩加、亞爾蘇、吉那、橙皮、オシアンデル氏最モ之ヲ稱ス、ナリ、又芳香品ヲ配用シテ、以テ其消化ヲ助ク、鐵劑ト芳香品ト配用ノ方例、安屈斯黠刺皮、越幾斯、加密兒列、越幾斯、各ニ鐵屑一錢至一錢半、格綸樸根末適宜、每粒二瓜ノ九ト為

シ、每服八九至十九、一日三四、ヘクケル氏

亞爾蘇穗三錢、桂皮、鐵屑各二錢、オプト酒二錢ニ浸

出スルヲ二十四時、瀘過シ用フ、一日三食匙、至

四食匙、ペレラ氏

括失亞、砂糖各一錢、礪鐵華十瓜、右研和、二十四包

トナシ、每用一包、一日四回、リクテル氏

鐵屑酒二錢、葛爾儒別涅末半錢、老利兒末三錢

桂皮末一錢、右調和、舐劑トナシ、每用一二卵匙、

一日三四、スチユトガル氏、萎黃病舐劑、

鐵劑ヲ用フレハ、便秘スルノ體質アルガ故ニ、

大黃ヲ配用スルヲ最佳トス、方鐵屑半錢、大黃、

桂末各二砂糖一刀右每朝夕、一劑ヲ服ス、ヒユ

ヘランド氏藥方編第二百五号胃中酸敗液アル者ニハ、

鐵劑ニ彼此ノ制酸品ヲ配用ス、方炭酸麻屈涅

失亞二十鐵屑三至四桂油糖劑半刀每用一劑、

一日三四、ナウマン氏

ブラウド氏炭酸鐵用法ハ、世普ク賞用スル所

ナリ、其方炭酸鐵、酒石酸鐵各半、達刺侃篤越謨

適右四十八丸トナシ、最初三日間ハ、早朝空心

ト、夜臨卧ニ每用一九、第四日、第五日、第六日、更

ニ日午一九ヲ用フ、第七日、第八日、第九日ハ、每

朝夕二丸ヲ用フ、第十日、第十一日、第十二日ハ、

日午又二丸ヲ用フ、第十三日、第十四日、第十五

日ハ、每朝夕三丸、第十六日以往ハ、每用四丸、一

日四回、此ノ如ク連用シテ、回復ヲ見ルニ至リ、

後漸次ニ其量ヲ減少スルヲ、始メ增多スル時

ノ法ノ如シ、

ビユク子ル氏用法ハ、炭酸曹達、撒兒末爾秩斯

各一又升鐵鹽二刀蒸餾水一号ニ溶和シ、每用

二十滴、一日三四回、ラヂウス氏

沃實涅鐵ハ、ビーロキユイン氏、トムソン氏、マ
クリユレ氏、及ゲドヂユングス氏賞用スル所
ナリ、但シ尋常ノ症ニ用フヘキニ非ス、唯萎黃
病、腺毒合併スル者、列印巴液鬱積ヨリ起ル者
ニ用フヘシ、

含鐵鑛泉中、有名ノ者ハ、ボクレト、ブリユセナ
シ、スクワルバク、フランセングブリユン、ペール
モント、ドリビユルグ、スラベン、カンスタドト、
スパ、キユドワ、アルトワセル、フリンスヘル
グナリ、皆萎黃病ニ施スヘシ、

ストルル氏ハ、橈酸鐵及鐵屑ノミニテ足レリト
ス、古人用フルカ如キ大量ハ、ストルル氏一日ノ
量、鐵屑ニ莖ニ至レリ方今取ラサル所ナリ、是レ
其消化スヘカラサルカ故ナリ、コル子リアニ氏
ハ、鐵屑一日夜ノ量、四匁、五匁ニ過キス、然レモ稍
多クモ五匁ヨリ十匁ニ至ルヘシ、蓋シ一分ハ必
ス大便ニ混レ去レハナリ、含鐵泉ヲ以テ、之ヲ證
スルニ、飲用スルト多シト雖、鐵分ノ體中ニ入ル
ハ、極テ少ナキ者ナリ、

ヒツテル氏萎黃病ニ鐵劑ヲ用フルノ一經驗

アリ、今之ヲ掲ク、一患者七週間ニ鐵百匁ヲ服
 盡ス、而ノ血中ニ入ル者、大畧三十二匁ナリ、是
 レ其增多スルヲ以テ之ヲ知ル、抑モ血中鐵分
 ノ比例ハ、健康體ニテハ、百分中六、二十ナリ、今此
 患者ハ百分ノ一、四ヨリ四、六ニ上レリ、則チ每
 日用フル所ハ、鐵二匁、而ノ其血中ニ入ル者ハ
 零六匁ナリ、是ニ由テ之ヲ觀ルニ、今泉水十六
 匁ニ、炭酸鐵零、五アリ、則チ純鐵零、二三六ナリ、
 之ヲ内外施用シ、兼テ食餌ヲ適良ナラシムレ
 ハ、萎黃病ヲ治スヘキ一固ヨリ疑ナシ、且ツ泉

水中含ム所ノ鐵ハ、其配合ニ由テ、消化シ易シ
 故ニ輕量ヨリ進テ、大量ニ至ルヲ得ヘシト、
 余謂ク此說實ニ然リト雖、其檢查法ハ十全ナ
 ラス、故ニ信シ難シ、

頑固症ニハ、鐵劑内用ニ、兼テ天造成ハ人造鐵水
 浴法ヲ施ス、鹽酸鐵下幾劑一匁至二匁又グロブマル一匁至二匁末一匁至二匁一浴ノ
 量トス、

此諸劑ヲ用フルニ方テ、兼テ攝生ヲ適宜ニシ、又
 適宜ノ食餌ヲ與テ、以テ血液製造ヲ佐クヘシ、清

潔ニノ酸素多キ氣中ニ在ラシム、山居ヲ最佳ト
 ス、體力ニ應メ、日々適度ノ運動ヲ為サシメ、昏暗
 ナル室内ニハ長居スルヲ勿ラシメ、植物ヨリハ
 肉類ヲ多ク食セシム、但シ消化力ノ度ヲ測リテ
 其品ヲ撰フヘシ、佳酒、或ハ微苦ノ麦酒ヲ飲マシ
 ム、未熟ノ果實、葛苳、酸性、脂性、鹽藏品、炙肉、茶等ハ、
 患者ノ嗜ム所ナレド、嚴ニ之ヲ禁スヘシ、精神ヲ
 鼓舞安慰スルハ、大ニ治法ヲ助ク、是レ遊行入浴
 ノ效アル所以ナリ、愈後治法ハ、神經質ノ少女ニ
 ハ、河水或ハ海水冷浴ヲ施ス、

姜黃病ニ賞用スル諸劑中、最ナル者ハ鐵ナリ、
 單用シ、又神經藥、殊ニ子宮ヲ衝動スル効アル
 臭氣ノ脂類、又通經藥ヲ配用ス、蘆薈、洎芙蘭、薩
 毘那、瓦爾拔奴謨、沒藥等、其神經藥ヲ配スルハ、
 神經諸患アリテ、姜黃病ヲ擬スル者ニ、一時快
 ヲ取ルニ用フ、但シ大量ヲ用フルモ少効ナク、
 阿魏數錢、或ハ半字ヲ用テ、少シモ變動ナキ者、
 葛斯篤樓謨丁幾二三滴ヲ用ヒテ、大ニ神經機
 能ヲ奮起スルヲアリ、醫宜シク之ヲ知ルヘシ、
 又鐵ニ通經藥ヲ配用スルハ、畢竟月經閉ヲ認

テ、以テ病原ト為スノ誤慮ニ出ル者ナレハ、余
 之ヲ取ラス、通經藥ヲ用ヒサルモ可ナル者多
 ク、又利ヨリハ害アルアリ、血液製造ヲ復治ス
 レハ、通經藥ヲ用フルトナキモ、經水自ラ来ル、
 然ルニ妄リニ通經藥ヲ與テ、血質ヲ復セント
 スルハ、大ニ本旨ヲ失スト云フヘシ、

感覺極テ敏捷、脈管神經機能亢起スル者ニハ、
 鐵劑ヲ與ルニ精意ナルヘシ、衝動ニ過レハ却
 テ病勢ヲ險惡ニ進ムルナリ、此時先ツ緩性收
 斂劑、收斂亞的兒、越栗矢爾赫篤里沃利、或ハ憐

酸等ヲ輕量ニ與テ漸ク慣レシムヘシ、又鎮定
 性神經藥効アリ、鑛水、エムス、スクランゲンバ
 ド、レイ子ルス、ランデク、亦良効アリ、之ニ兼用
 スヘキハ、微温浴、又誘導法トノ芥子泥、乾角法、
 摩擦法ナリ、此ノ如クスレハ、患者能ク鐵劑ヲ
 堪フル者ナリ、

以上記スル所ハ、萎黃病治法ノ通則ナリ、諸般ノ
 症アルモ、各々之ヲ治スルトヲ要セス、固ト其諸
 症ハ、血液製造ノ失宜ニ由ル者ナレハ、其原復治
 スレハ、皆隨テ除クヘシ、然レモ、一局部機能失宜

アリテ姜黄病ト併セ發スル所ニシテ、衝動劑ヲ
 要スル者アリ、是レ吐劑、下劑、皮膚、神經、筋ヲ刺戟
 スル品等ノ偉効アル所以ナリ、吐劑ヲ用フルニ
 由テ、從來麻痺セル部、其機能ヲ奮起シ、是ニ於テ
 收斂劑、始テ其效ヲ奏シ、全治ヲ得ルコトアリ、衝動
 劑ヲ用フルニハ、衰弱ヲ遺サ、ル品ヲ撰フヘシ、
 例之吐劑ニハ吐根、下劑ニハ大黃、蘆薈、スタル氏
 泄利丸ノ如シ、マルカルル、ハルル氏ハ、蓖麻油一
 勺ヲ與テ、以テ腸ヲ疎滌シ、後蘆薈、硫酸鐵各二匁
 ノ丸ヲ、一日二回、食時ニ用フ、奇効アリトス、皮膚

刺戟ハ、揮發芳香洗劑、鐵浴、撫摩等ナリ、
 血液製造ノ機、常ニ復シ、月經通利スルニ至レハ、
 凡ソ之ヲ障止スル所以ノ諸件ヲ避ケ、患者此時
 限間ハ、葍ニ就テ温養ス、經行十分ナラサル者ハ、
 撫擦法ヲ施コシ、内胯ニ乾角ヲ貼シ、腹部ニ芳香
 藥品ノ蒸漏法、芥子泥ヲ貼シ、之ヲ促スヘシ、尚數
 月ノ間、此ノ如ク注意スルコトヲ怠ルコト勿レ、フラ
 子ル製ノ襯衣ヲ著スヘシ、更ニ輕量ノ鐵劑ヲ服
 シ、休歇シテ復タ之ヲ用フ、此ノ如クエシ、諸症全
 ク除キ、治法局ヲ終フニ至ル、諸症再發スル者ハ、

鐵劑ヲ與フルヲ、前ノ法ノ如シ、
記スル所諸法ハ、萎黃病諸種ノ症ニ用フヘキ者
ナレハ、醫之ヲ領解スレハ、治ヲ處スルニ難キヲ
ナシ、此他妙効品ト稱スル者少ナカラサレト、今
之ヲ枚舉スルヲ要ナシトス、但シ二品ヲ説クヘ
シ、則チ滿俺ト、寒水灌法是ナリ、

滿俺ハ、往時カウスク氏、ゲレラ氏、セントマ氏
賞用スル所ニテ、近時ニ及テ、ハンノン氏最モ
大ニ之ヲ賞揚ス、而シテ萎黃病者ノ血ヲ分拆シ
テ検査シテ曰ク、或ハ鐵量ハ平全ノ如クニシ、

滿俺ノ量減少スル者アリト、且ツ此二症ノ狀
態ヲ詳説ス、血中滿俺減少スル者ハ、其症萎黃
病ト大ニ相似タリ、唯皮色平ノ如ク、爽活、腰部
疼痛、下肢疼痛、諸般ノ神經症、偏頭痛、不眠、神思
沉鬱、心悸動、經閉等ナリ、ハンノン氏此症ニハ
硫酸滿俺、鹽酸滿俺四分ハノ一、一ハニ至ル、或
ハ更ニ多クス、萎黃病重症ニ於テ、血中ノ鐵分、
滿俺共ニ減少スル者ニハ、滿俺ト硫酸鐵トヲ
配用ス、又間歇熱後ノ萎黃病、粘液漏泄過多、及
ヒ他ノ慢性病ニ、滿俺ヲ用ヒテ良効アリ、ペト

レキユイン氏亦滿俺ヲ試用スレト、必ス多量
 ノ鐵ヲ配用セシカ故ニ、其經驗スル所、適切ナ
 ラス、ハンノン氏又曰ク、鉛、銅、毘斯密篤ハ能ク
 萎黃病ヲ治スルヲ、鐵及ヒ滿俺ノ如シト、
 フレユレイ氏ハ、萎黃病、及ヒ乏血ニ、寒灌水法
 ヲ賞用ス、以テ細尿管ノ機能ヲ奮起シ、血質ヲ
 復良シ、温暖ヲ起シ、滋養補給ヲ盛ニス、
 ハンノン氏曰ク、尋常ノ食物中ニハ必ス鐵及
 ヒ滿俺アリテ、以テ血中費耗スルノ此二成分
 ヲ補給ス、然レト消化スルノ時ニ方テ、腸中ニ

硫水素氣ヲ發生スレハ、則チ鐵及ヒ滿俺ノ集
 合ヲ分拆シ、溶化セサルノ性トナス、是ニ於テ
 血中此二成分缺乏スルナリ、是レ萎黃病ニ於
 テ見ル所ニテ、此病ハ腸中硫水素氣ヲ發生ス
 ルヲ多キ者ナリ、此分拆ヲ防クニハ、無害ノ鑽
 屬能ク硫水素氣ヲ吸收シ、又之ト合シテ溶化
 セサル硫黃集合ヲ為ス者ヲ用フヘシ、此性ヲ
 具有スル品ハ、毘斯密篤、鉛及ヒ銅ナリ、鐵及ヒ
 滿俺亦然リ、

附言

今茲ニ記スヘキノ一病アリ、是レ近世始テ衆醫
注目スル所ニシテ、一種ノ合併症ナリ、則チ
腺腫、眼球腫、及心臟病

ノ合併症ナリ、余此類ノ症ヲ診スル六人、又他人
驗スル所ニ十一人アリ、今記スル所、此經驗ニ據
ルナリ、

其症始メ必ス心病ノ兆候ヲ發シ、悸動甚タシク、
努力シテ運動スルノ後、最モ甚タシク、短息、煩悶
ヲ兼ヌ、數日ニシテ、甲状腺腫脹シ、兩眼一種ノ光彩
アリテ、漸次ニ腫起シテ、窩外ニ突出ス、此諸症一

齊ニ并ヒ發ス、諸症逐次ニ増進スルカ故ニ、患者
醫治ヲ請フニ至ル、殊ニ眼球突出シテ、大ニ外貌
ヲ醜ニスルヲ以テ、夙ニ治ヲ求ムル者アリ、之ヲ
診スルニ諸症左ノ如シ、

眼瞼大ニ弛縦スルカ故ニ、眼球非常ニ大トナル
カ如シ、是レ此病ノ初起ヲ誤リ認テ、眼球水腫ト
ナス者アル所以ナリ、眼瞼大ニ隆起シ、眼球突出
シ、稍眼瞼ヲ壓セハ、容易ニ窩内ニ沉没スレト、指
ヲ放テハ、復タ忽チ彈出ス、是ニ於テ大ニ顔貌ヲ
變ス、而シテ視力ハ妨クル所ナシ、或ハ稀ニハ近視

ナルアリ、瞳子散大スルアリ、甲状腺稍微響アリ、
 頸動脈ノ鼓動ニ應シテ煽動ス、但シ全部ニ於テ
 スルアリ、一部ニアルアリ、右側ニ於テスルヲ最
 モ多シトス、耳ニテ聽クニ數般ノ音アリ、患者兼
 テ心悸動ヲ惱ミ、體動、神勞ニハ必ス増進ス、而シテ
 心藏器質ニ於テ疾患アルヲ見ス、心ノ搏動スル
 カ大ニノ廣シ、且ツ疾數ナリ、一分時間、百二十動
 百三十動ニ至ル、心藏大動脈共ニ音アリ、之ヲ敲
 キ試ムルニ、心藏ノ周圍増大ヲ見ルヲ甚々稀ナ
 リ、此三種ノ症、合併スルノ患者少ナカラス、然レ

凡、或ハ眼腫、或ハ腺腫ノ一症ヲ缺ク者アレ凡、心
 病ハ必ス發見スルノ症ナリ、又記スヘキアリ、夫
 レ甲状腺腫ト、眼球突出トハ、輕重一樣ナラサル
 者多ケレ凡、必ス心動ノ劇易ニ應シテ、増減進退
 スルナリ、
 之ヲ病ハ者、多クハ婦人ニメ、必ス萎黃病ノ兆候
 ヲ發ス、皮膚及ヒ粘液膜、滲淡色、靜脈音アリ、異嗜、
 譫妄頭痛、耳鳴、眩暈、卒倒、月經不順、血色淡白、白帶
 下、經閉、又或ハ兼テ子宮病症、梅核氣、四肢厥冷、神
 經疼痛、神思鬱憂ス、バセドウ氏ハ、精神活潑ナル

者アリトスレバ、此症極テ少ナリ、或ハ萎黄病ノ症ナク、以テ此病ハ萎黄病ニハ拘ハラサル者ノ如ク思ハル者アレバ、是亦極テ少ナリ、

經過ハ緩慢ニシテ、數月、數年ニ及ヒ、増減發歇スルアリ、間歇熱ニ罹ルコトアレハ、殊ニ増悪ス、

預後ハ、器械性病ノ有無ニ順テ異ナリ、其有形性ノ者ハ、終ニ根治スルコト能ハス、唯萎黄病症ヲ治シテ、以テ困難ナル症ヲ緩解スルノミ、又心藏ノ有形因ナキ者ハ、假令其症甚シキ者ナルモ、適宜ノ治法ヲ施セハ、漸次ニ快路ニ向ヒ、遂ニ全愈ヲ

得ルナリ、

原因知ル可ラサル者アリ、乏血ノ症アル者ハ、其因、脱血、下利、子宮出血、白帶下、哺乳過久、胃血、腸血等ニ在リト知ルヘシ、或ハ精神沉鬱ヨリ之ヲ誘起スル者、亦少ナカラス、

從來解剖シテ驗スル所ハ、心藏弛縱、肥大、障膜一部肥厚トナリ、其作用ヲ失シ、甲状腺汚液密敷シ、水液充盈シ、眼窩ノ底面ニ、脂肪鬱畜シ、以テ眼球ヲ突出セシムルノ原タルアリ、ヘウシソダゲル氏驗スル所、一患者、肝藏脂肪多ク、兼テ脾藏増大ス、

原病性解剖ニテ未タ其理ヲ詳カニセサル者アリ、
 一、此三症、何ノ故ニ常ニ相合併スルヤ、
 二、腺腫、
 眼腫、何ノ故ニ心動ノ多寡ニ應シテ増減スルヤ、
 恐ラクハ心悸動スル片、上行大静脈、又其枝末ニ
 静脈血鬱積スルニ因ルナルヘシ、此三症、必ス偶
 然ニ合併スルニ非ス、内景必ス之ヲ結連スル所
 以ノ者アルヘシ、然レモ未タ之ヲ詳カニセサル
 ノミ、治法ハ後件ヲ知ルヘシ、
 多クハ萎黄病症ヲ發スルヲ以テ、之ヲ治スルヲ
 標準トス、而シテ必シモ有形性因ノ有無ニ拘ル

ナシ、最モ鐵劑ヲ佳トス、症ニ隨テ大黃、蘆薈等ヲ
 配用ス、連用持久シテ、數年ニ至ルヘキアリ、兼
 テ滋養性ノ食物、田野ノ空氣、含鐵鑛泉、之ヲ要ス
 ルニ、萎黄病治法ニ依ル、人或ハ漢實涅、殊ニ沃度
 加里、或ハアデルヘイド鑛泉ヲ賞用スルアリ、余
 驗スル所ノ二人、萎黄病症ナキ者ニ、心藏ノ動機
 ヲ鎮靜スルニ、鑛酸、實艾答利私醋ヲ用ヒテ、良効
 ヲ得タリ、
 更ニ血液調和失宜スルノ疾患アリ、其本病、脾病、

靜脈病、肝藏病篇ニ於テ説クヲ至當ナリトス、故
ニ次テ血液循環諸病ヲ論スヘシ、

侃斯達篤卷之一終



